

写真と筆の間に咲いた天下名山

—徳田兄弟の金剛山写真集と絵画から見る写真時代の近代山水画—

Haely CHANG

本発表では、徳田富次郎が写した金剛山の写真、そして弟の玉龍が描いた金剛山景について紹介したい。在朝鮮日本美術作家、徳田富次郎と徳田玉龍兄弟は朝鮮が日本に合併された 1910 年に韓国に移住し、朝鮮半島の北東の果てに位置する金剛山で山籠研鑽を行う。兄の富次郎は金剛山の近くにある遠山で「徳田写真館」を開業し、金剛山の風景を集めた写真集を多数刊行した。一方、弟の玉龍は金剛山を素材として絵画を描き、その風景画は観光商品の一部として販売された。

富次郎の金剛山写真集は 1912 年から 1941 年まで多様な形で製作された。その変遷には近代期金剛山観光の歴史と深い関係性があることが見て取れる。1912 年から刊行されたと見られる「朝鮮金剛山：天下の絶景」写真集シリーズは金剛山を探勝したことの無い読者に向け、その名所を紹介する目的で作られた。1920 年後半以降、金剛山は人気の観光名所となった。この時期に発売された「万二千峰金剛山：朝鮮」シリーズは旅行ガイドブックのように作られた。富次郎の写真集は金剛山の名所をイメージとして再生産する大きな役割を務めた。

弟の玉龍の金剛山絵画は兄の富次郎の写真からその形の基本を捉え、その上構図や色感に創造的な変化を追加する特徴がある。玉龍は写真には収まりきれない空気感を、独自の経験から再構築して一枚の絵の中に表現した。白黒のみの写真と異なり、絵では『色』を自由に使うことができた。絵にしか表現できない季節感と時間を描写することを得意とした。玉龍の絵画の中には彼だけの物語が入っていたと言える。独自の視点を通して金剛山を描いた玉龍の絵画作品は、当時人気を博した。

このように、徳田兄弟の作品を通し「写真の影響力が高まった時代、山水画がどう変化したか」について、今後更に研究を進める予定である。写真時代の風景画の変遷から、新しい視覚文化について考察していきたい。